

島田正治

日記らしい日記は、最近はつけていない。メモていどといってよいだろう。以前は一日一ページときめてけっこう細かく書いていた。メキシコで自炊、三度の食事に何を食べたかを記録しようとしたこともある。しかし、これは長つづきしなかった。とにかく食べる前にこれこれと書いておかないといけない。食べたあと、さて、きょうは何を食べたろう、半日前のことなのに思い出せない。一品二品ならまだしも、それ以上になると、とうてい無理だ。すいているお腹には記録より食べることのほうが先になる。

いつの頃からか日記は一ページ一週間になってしまった。日曜から始まって土曜日まで。七日間に七分した。三行日誌といってよい。これは書くのにじつに簡単であり気易く書ける。一ページ、一週間分を見直すと、何をしたかが一目瞭然にわかる。作品制作のこと、来訪者、またどこへ出かけたかなど。うしろには、もらった手紙、出したハガキの宛名氏名を書いておく。これは誰にいつ出したがあとでよくわかる。

手紙出してすぐ返事くれる人、またそうでない人。受け取る側の諸事情もあるが、返事はすぐに書いてもらえるのがうれしい。出してもいつまでも返事が来ないと、一体どうしたのか、病気でもしているのではないかと余計な心配をする。だから、わたしはもらった手紙の返事は、その日のうちに書いて出すのである。こちらのハガキがいつ頃着いて、すぐに返事くれた。その気持が伝ってくる。なしのつづ手は好まぬ。出した手紙が無事相手に渡ったのかどうか、そこまで考える。手紙書くは元気印となる。

さて新年になってから早々に「サンアントニオ村、チャパラ周辺描く一百景」の制作に着手、またしても村の中へ描きに行くようになった。村の様子も大いに変ってきた。あっというまに村のはずれに一本道ができた。新築の二階家が建つ。むかし、貧しかったという村のイメージがとりのぞかれつつある。銀行、ホテル、はまだなくレストランが二軒、人口もふえて、そのうちにきっとできるにちがいない。アメリカ人、カナダ人、ヨーロッパの人たちも住みはじめている。

メキシコ人も新しい顔ぶれがある。村の道端で描いていて、物珍しげに見てゆくのは最近ここへ引越してきてきたのだろう。声もかけない。逆に、以前からの旧い人たちはみな声をかけていってくれる。とにかくにも温かい眼がこのわたしを見守ってくれ、また応援してくれているのだと思う。

描きはじめて、まだ十作余、楽な気持で自由に描きたい。どのぐらいの期間がかかるだろうか、決して無理はせぬ。のんびりやる。先はまだまだ長いのである。死に急ぐこともあるまい。そうでなくてもこの急速度の移り変わる世の中、それでこそ、このメキシコでの生活ののんびりかげん、マイペースの生き方こそと考える。

もう二十年近くメキシコに住んで、いわゆるメキシコ流生き方も少しはわかってきた。その多くは決して腹を立てない。あまり怒ったりしない。いつも笑顔がある。これは日本人にはなかなかできないことでもある。国民性のちがいでもあろう。さて、どちらがよいか、大いに考えてみる必要があるにちがいない。

(・・・次号につづく)

ご意見・ご感想は
右上メールボタンよりお送りください。